

福島第一原発事故―家畜動物の未来

岩手県岩泉町立釜津田中学校

一年 佐藤 夢 菜

私は中学生になって、福島第一原発事故のその後について興味を持ちました。世の中のことに目を向けるようになったのは「私の成長」だと思います。その中でも「家畜動物の未来に向けて」というところに着目しました。

私の家でも、福島で飼われている黒毛和種と短角牛を約四十頭飼っています。小さいころから牛が好きで、出荷や市場に連れていかれる牛を見ると悲しくて、いつも泣いていました。また、小さいころから飼育の手伝いをしていたので、「福島の牛はどうなってしまったのかなあ」と考えるようになりました。

福島では、人々が避難した後、牛たちはえさも水ももらえず、放置されました。牛たちは何日も何日も飼い主を呼ぶように鳴き続けました。半数以上が餓死してしまい、自分でひもを切って逃げた牛も、国の指示で殺処分されました。

何もしていない牛たちがどうして殺されなくてはいけないのか。原発事故は人間のせいなのではないのか。商品にならないから捨てる、お金がかかるだけだから殺す、そんな考えに腹が立ちました。私にとって牛は、家族だと思っているので、殺処分には

絶対反対です。

私は現状についてもっと知るために「被ばく牛『たまみ』」というドキュメンタリーを見ました。この牛は、原発事故が起きる半年ぐらい前に生まれました。親のいないミルク育ちでも人懐っこく、元気で優しい牛だそうです。たまみは四年半ずっと牧場にいました。たまみは群れの牛でもとても若い牛で、全然草にありつけないそうです。

たまみのいる農家では、生きていた全頭を保護して、自宅牛舎で育てているそうです。私はそのような農家が増えて、救える命を増やしてほしいと思いました。

この農家の牛は何日かに一回検査を受けます。あの日の検査のとき、たまみの体全体に白球があることが分かりました。この白球は「被爆のせいなのか」それとも「環境の変化によるストレスなのか」調査が始まりました。いまだに、なぜ白球が出るのかどうかわかっていないそうです。

また、この牧場にいるある一頭の牛は、災害後に広がった、牛白血病にかかってしまいました。この病気は助けようがないので、しょうがなく殺処分されました。

私は、自分の家の牛が病気にかかったときは、とても心配です。と近くにすることが多かったです。また、台風十号のときには家を離れて避難したので、水もえさもあげられない日があり、牛は大丈夫かなあと本当に心配しました。

一頭一頭の牛に名前をつけ、なめられたりけられたりしながら兄弟のように遊んだりした存在です。だからこそ、福島で起きている出来事は、私には耐えられないことです。

でも、本来は「頂く命」だけど、だからこそ無駄にしたり見捨てたりしてはいけないと思いました。限

りある命を最後まで見届ける、これが私の思いです。

福島で起きていることは、大人だけ、福島だけの問題ではないと思います。私は、子どもにも都会の人にも知ってほしいです。「ひどい」「殺処分なんてかわいそう」または、「どうでもいい」「被爆した家畜動物は危険だ」「殺処分したほうがいい」など、いろいろな考え方があると思います。でも、こんなことになったのは、私たち人間が起こしたことだと思います。だから、簡単に殺すのではなく、どうしたらこの未来に生かせるのか考えたほうがいいと思います。そしてこれからの未来のために家畜動物や崩壊した町をどうするか考えていかなければならぬと思います。また、これから災害が起きたときの対策を考えていきたいです。これが私のこれからの「挑戦」です。

私は大人になったら福島に行つて、現状を見て、福島の役に立てることを一つでもやりたいです。